

# 文明の”衝突“から”対話“へ

イラン・イスラーム革命二十年との関連で

山内昌之

*yamauchi masayuki*

## I ”文明の衝突“とハンチントンの死

「自分の仕事はささいなことながらを大きく見せたり、そのように思わせることだ」。これはフランスの思想家モンテーニュが『エッセー』（五一章）のなかで紹介した古代の修辭

学教師の言である。つまり、小さな足にも大きな靴を作ってやれる靴屋もどきというわけである。サミュエル・ハンチントンが一九九二年に論文「文明の衝突」を初めて発表した時、私はさながら小さな足のために大きな靴をつくる大雑把な靴屋のような印象を受けたものだ。その直後のNHKの正月番組で彼とじかに対談した機会にも同じ感想を抱いた。

なにしろ彼の説明は、誰にも分かる枠組みが単純明快だけでなく、大胆な予測にも充ちていたからである。その見立てによれば、八つの主要文明をもつ現代世界の未来は、西欧キリスト教圏とイスラーム圏や中国儒教圏といった宗教を基礎にした文明間の摩擦と紛争が避けられないというものだった。生前のハンチントンは、アメリカとの同盟関係をもつ日本でさえ、日本文明が異質な西欧キリスト教文明、つまりアメリカと衝突するのではないかと予見したのである。

文明という言葉は、かつて歴史学ではトインビーの大作『歴史の研究』から日本の世界史教科書にいたるまでよく使われていた。しかしフランスのアナール派のように微細な社会史を描く傾向がもてはやされる風潮のなかで、人氣が落ちた文明という枠組みを、誰にもなじみやすい枠組みとして政治学に応用した点にハンチントンの才がある。そして、『西欧の没落』を書いたシュペンゲラーばりの文

明史家よろしく、文明間の衝突を国際政治で予見したのである。そのインパクトは小さくなかった。

折から西欧にとって、ソ連解体に伴い共産主義はもはや脅威でなく、湾岸戦争を経て、中東はもとよりヨーロッパ社会の内部からも人口増や石油エネルギーの問題などからんだイスラームの活力が浮上していた。こうしてチェチェンやボスニア・ヘルツェゴヴィナの紛争をたやすく分析できる言説として、ハンチントンの議論はとくに欧米の人びとに迎えられたのである。書物となった『文明の衝突』が三十九の言語に翻訳された事実はこの主張の人氣をそれなりに物語っている。そのうえ、九・一一同時テロで米本土がムスリムの若者によってテロ攻撃を受けたことは、彼の存在を予言者めいたものにした。

また、今年に入ってパレスチナ人の一般市民の間に大規模な犠牲者を出したイスラエルのガザ攻撃を見ていると、異なる文明はやはり衝突するののかという錯覚にとらわれやすい。ガザの危機をへブライイ文明対イスラーム文明の対立の象徴と考える人もいるにちがいない。あまりにも複雑な地域紛争や暴力の連鎖に接すると、つい単純明快な理論に魅かれる人も多いだろう。実際、冷戦終結後に「文明の衝突」を唱えたサミュエル・ハンチントンの考えは、新しい世界の構図を解釈する拠り所と

して歓迎されたのである。

しかし、文明とは衝突だけでなく、新たな知識や技術を互いに与えあい、共存や接近や融合もするという認識が彼には弱かった。ホメロスの『オデッセイア』にせよヘロドトスの『歴史』にせよ、西洋文明の基礎をつくった古代ギリシア文明の名著の主題は、やはり文明の衝突であったが、ハンチントンよりも、異質の文明に敬意に近い好奇心を払っている。よし尊敬とまでいかなくとも。ハンチントンの出した靴は、「歴史のない文明国」アメリカの大きな足にはぴったりでも、歴史のある文明をもつイスラームなどの複雑な世界を理解するにはサイズが必ずしも合わなかったのかもしれない。

また、政治現象の一面を切断してみせた妙味はあるにせよ、文明の衝突という考えは複雑な世界史や国際政治を単純に割り切りすぎるきらいもある。「プロクルステスの寝台」というギリシア伝説がある。体が長いと切り短すぎるとたたいて伸ばし寝台におさめようとした男の故事だ。政治学者が歴史学の基本概念を国際政治に活用した積極性は評価できる。しかし政治現象の面白さは、複雑さと単純さが入り組んでいることだろう。文明の衝突という枠組みには、どこかプロクルステスの寝台を思わせる面もある。もとよりハンチントンはその程度は先刻承知で、人々の反応



を楽しんでいただけかもしれない。NHKの正月番組で対談した私には、彼の魅力は茶目っ気なところにあるような気もしたものだ。

## II “文明の衝突”とイラン・イスラーム革命三十年

ハンチントンによる文明の衝突テーゼと対照的なのは、イランの前大統領のハータミが出した文明の対話という考え方である。折しも、今年はいらん・イスラーム革命からちょうど三十年にあたる。ソ連解体や冷戦終結にもまして、この革命の記憶はおろか、事実さえ知らない人も増えている。ところで、近代あるいは現代の誕生は革命という陣痛を伴っていた。フランス革命は自由や人権を尊重する原理をもたらし、また、ロシア革命は疎外された労働者の政治参加を理想として謳い、中国革命は土地に縛り付けられた農民を地主の圧制から解放した点で、世界史上のどこにも通用する普遍的なメッセージをもっていた。これと比べるなら、一九七九年のイラン革命は「イスラーム革命」と名乗っている点でイスラームの世界に特有の政治現象として理念や価値観の広がりには乏しいかと思える。

こうしたイスラームの歴史状況から文明の対話という考えが導かれたのは興味深いことである。しかし、この文明の対話はイランが陥った苦境の打開、なかでもアメリカとの断交によるダメージの突破を狙った外交的行動

きだったことも理解しておかなくてはならない。

パレヴィー王朝の専制支配を覆したイスラーム革命は、ホメイニーという宗教指導者（法学者）に指導されながら、バザール商人、農民、都市中間層、知識人学生などが幅広く参加し、宗教者だけでなく世俗の政治家やリベラル派、さてはマルクス主義者たちも加わる政治変革であった。もともとは強韌なコスモポリタニズムや活気に満ち溢れ、もろもろの考えを含む多元論的な革命イデオロギーの活力をもっていたのである。この多元性ゆえに本来対話という要素も含まれていたはずである。

反抗心の旺盛なシーア派の教理に刺激された革命だったとはいえ、そこには植民地や保護国として欧米に支配されたアジアをはじめ他の大陸で人びとが受けた歴史的トラウマを解消する手がかりもあつたのだ。それが変容したのは、ホメイニーの強烈な個性もあつたにせよ、多元性を尊重できたはずのイスラーム共和国を、彼の死後に病的なほど「法学者の支配」という考えに服従させ既得権を守ろうとしたシーア派指導者の強烈な権力意志があつたからである。これを可能にしたのは、イランの行政機構において大統領職にもまして絶対的な権威を行使する「最高指導者」（現在はハメネイ）の憲法による力である。

そのうえ、大統領や国会議員の選挙にあつて立候補資格さえ審査できる「監督者（護憲）評議会」は、シーア派宗教者の牙城であつた。また、イスラーム共和国憲法が危険にさらされないように独特のシーア派言語で法解釈をおこなう司法部も宗教者の堡壘にほかならない。大統領や国会議員さえ宗教者のメガネに適わなくてはならないのに、監督者評議会などは有権者の審判を受けるものではない。

つまり、イランの権力構造は多重化しており、これにしばしば対外危機を醸し出す革命防衛隊を加えると、政治外交権力の重心はとらえどころがないほど複雑な性格をもっている。結局、ホメイニーの残した「法学者の支配」という統治理論は、制度上は二つの民主的要素である大統領と国会を民主主義の象徴として認めながら、それらをシーア派の宗教権威とその機関に従わせることでほぼ無限の権力を握つたのである。これは国内的には、もはや対話を重視するという姿勢ではありえない。

しかも、シーア派指導者による長期支配と権力独占には腐敗や汚職がつきまとつた。ラフサンジャニ元大統領は、イランIIイラク戦争後の復興需要計画にイラン経済の八〇％超を占める石油収入を原資に民間部門を育てたこともあつて、革命後に萎縮していた中産階級の経済活動復帰をもたらし、その反面、

景気の刺激はシーア派指導者という非生産的かつ寄生的な層に富の蓄積を許すことになった。

一九九七年の大統領選でハータミが勝利を取めたのは、政治の自由化や経済の透明化によって共和国としてのイランの未来展望を民主的に考えたいという有権者の希望だったのだろう。アメリカとの関係改善をひそかに内包した文明の対話も、ほかならぬアメリカからの積極的な反応を導き出すにはいたらなかった。悪いことに、ハータミの民主的改革努力は選挙の洗礼を受けていないシーア派指導者の妨害にいつもさらされ、その優柔不断のせいもあって彼も失意のうちに大統領職を去った。結局、文明の対話の事業はうまくいかなかったのである。

### Ⅲ 『文明の対話』再開の新たな可能性

文明の対話を呼びかけたハータミなどイランの穏健改革派の足を引く張った別の力はアメリカのブッシュ大統領と「ネオコン」と呼ばれた周辺保守層であった。ブッシュ大統領が二〇〇二年一月の一般教書演説で、北朝鮮やイラクと並んでイランを「悪の枢軸」と呼んだことから事態が変わった。そして、イラク戦争が始まるとイランは自分が次のターゲットになると考えたのも当然だろう。アメリカは短時間でイラクのフセイン政権を打倒したことに自信をもち、ハータミの柔軟な姿勢

に関心を示さなかったのだ。ハータミによる「文明間の対話」の呼びかけは、アメリカとの関係改善へのメッセージにほかならなかった。いずれにせよ、穏健改革派ハータミの後継者モスタファー・モイーンは二〇〇四年の大統領選挙で大敗し、「鍛冶屋の倅」こと保守強硬派のアフマディネジャドが当選した。この大統領はむしろ文明の衝突を「自己実現的」に引き起こそうとしている。

ハータミにしても、イラン＝イラク戦争後の復興、バブルから取り残されたまま貧困にあえぐ都市部や農村部の膨大な下層民たちの生活改善には失敗していた。あるいは、そうした関心をもたなかったといつてよいかもしれない。アフマディネジャドは、貧困層や公民権を奪われた層の心に訴えかけ、六三%の高支持で大統領に選出されたのである。この新大統領は反米だけでなく、ホロコーストは存在しなかったと公言し、ユダヤ人はヨーロッパに戻るべきだと挑発的な反イスラエル言辞を重ねた。まさに文明の衝突論者といつてもよい。しかし、育ちかかっていた都市の中間層の力の失墜と貧困層のポピュリズム化によって、イラン経済がグローバル化した新自由主義経済のどこにも座る場所がなく、失業者は相変わらず減らない現実こそアフマディネジャドの直面した厳しいリアリティなのであった。

アフマディネジャドがとった隘路からの脱出は、国内で行き詰まりを来した自由や改革の理念を外に向けて発散させ、イラクはもとよりレバノンやガザで現地の支配体制を動揺させ、新たな民族解放運動の旗手としてのイランを印象つけることに向けられた。シーア派の広がる湾岸諸国からイエメンにいたる広い地域でもイランの影響力は権威を増したのである。皮肉なことに、イランにおける民主主義の定着や国際的な文明の対話を阻害したいちばんの要因は、アメリカのブッシュ政権による「悪の枢軸」への批判、文明の衝突を体現化したかのようなイラク戦争の開始にほかならなかった。しかしイランでは、大統領や国会議員の選挙で政権交替もおこなわれてきた。どれほど「傷ついた民主主義」であり、欠陥だらけのシーア派宗教者の恣意に左右されていても、それが「民主主義」であることには変わりがない。

六月の大統領選挙には文明の対話をかつて訴えたハータミが再出馬すると伝えられている。新たな規模と質によってオバマ大統領とイランの新体制との間に文明の対話がおこなわれ、長い敵対関係に「チェンジ」が起こることを期待したいものだ。